

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24618010

研究課題名(和文) 岩手沿岸北部被災地復興における地域連携型のコンパクトな居住モデルの導出

研究課題名(英文) Creating compact and inter-regional models for recovering the earthquake-damaged district in the north seaside of Iwate prefecture

研究代表者

玉川 英則 (Tamagawa, Hidenori)

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授

研究者番号：10171886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東日本大震災の津波被災地であり、研究メンバーが発災直後から支援調査活動を継続し「顔の見える関係」のある岩手県野田村を対象に、現地での復興シャレットワークショップ(CWS)の実施をとおして、復興空間パターンを抽出し、周辺他都市との機能連携でのコンパクトな居住復興モデルを実践的かつ理論的に導出しようとしたものである。

3年の研究期間(プレスタディ期間を含めれば4年間)において、素朴で物的な計画を中心とした提案から、期間途中から民泊プログラム等を組み入れることにより、当地のなりわいを体験し被災地に寄りそう中で、より地域に密着した提案を考案していくプロセス構築がなされていった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to create compact residential recovering models through a series of the students' workshop programs after the 3.11 disaster in Noda village to support community redesign.

The Charrette-workshop (CWS) in Noda has been held as one of recovery support activities since 2011 summer as a students' training camp. University and college staff and students were gathered from Tokyo, Aomori, and Kansai area and they have developed CWS program to follow recovering process of the village step by step every year. After the primitive stage in 2012, in 2013 and 2014's program, students have learned the vernacular lifestyles through an overnight homestay program and experiences of fishery, agriculture, handcraft or preparation for village festival with community members. And they are going to propose various sketches of the place where the community would be encouraged. We intend to discuss for a long-term redesign of Noda village through the CWS proposals with villagers.

研究分野：都市・地域計画

キーワード：東日本大震災 復興計画 岩手県野田村 なりわい体験 シャレットワークショップ

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災発生直後、被災地に近い研究分担者・河村が中心となり津波被災地への調査・支援を行っていくうち、河村と関係のある東京の首都大学東京（以下首都大）と工学院大学（以下工学院大）のスタッフを加えた研究グループでは、組織的な支援体制を構築していこうという機運が高まった。その中で、本研究の基礎となるシャレットワークショップ（以下CWSと表記。シャレット（charette）の原義はフランス語で「荷馬車」）を着想するに至り、2011年6月から7月にかけての準備のもと、7月27日～30日に日程で第1回野田村復興まちづくりCWSが開催され、学生・教員約40名の参加があった。

以上で得た手応えをもとに、野田村を対象に、近隣都市と機能連携した「コンパクトな復興居住モデル」を復興計画論として実践的かつ理論的に導出したいと考えるに至り、本研究課題を応募申請するに至った

2. 研究の目的

本研究は、東日本大震災の津波被災地であり、応募メンバーが発災直後から支援調査活動を継続し「顔の見える関係」のある岩手県野田村を対象に、避難行動調査や現地での復興シャレットワークショップ（CWS）の実施をとおして、居住復興モデルを実践的かつ理論的に導出しようとするものである。

当初、具体的な目的としたのは、避難行動調査に基づく復興空間パターンの析出、復興シャレットワークショップ（CWS）手法の構築、被災地に寄りそった復興調査と復興まちづくり提案方法の実践的解明、近隣都市連携型でコンパクトな復興モデルの考究の4点であった。

しかし、期間途中、若干の見直しが行われ、の「被災地に寄りそう」という姿勢に重点をおいた活動へと変化していった。

3. 研究の方法

3 - (1) . 2012 年度

2012年4月本研究課題は採択され、初年度である2012年度より、前年度からのプレスタディを発展させ当初研究計画に沿った活動を開始した。

まず、2012年4月より八戸高専教員・学生メンバーを中心として、現地・岩手県野田村の最新の動向の把握に努めた。その後、5月～7月にかけて、東京グループ（首都大、工学院大）において教員とその研究室所属の大学院生により、5回にわたりCWS事前打ち合わせとセミナーを開催、課題の抽出と今年度の現地CWSに向けての目標設定を行った。

以上の準備を経て、現地CWSを8月18日～20日に実施、約50名の参加者を希望するテーマごとに、堤防公園、モビリティ、高台住宅地、中心市街地、津波避難、なりわいの6つのグループに分け、現地調査と議論を経た上での提案を行った。

成果の概要を短フレーズによって示すと以下の通りである。

- ・堤防公園：公園予定区域をメモリアルパーク、共同農地等に区分し、機能と利用プログラムを個々にデザインする。子供が遊びたい空間を村民参加でつくる。

- ・モビリティ：コミュニティバスと有償ボランティアバスのハイブリッドシステムとする。町民自らがモビリティ事業に参加する。

- ・高台住宅地：アクセス部に広場と共用施設を、また、共同で利用する花壇や菜園を配置する。住宅団地入り口部に「まちの駅」を設ける。

- ・中心市街地：地域のシンボルでもある神社の大鳥居を中心とした4つの軸線による空間構成とする。市街地内に共同作業・創作の場を確保する。

- ・津波避難：避難の空間を日常生活の空間に埋め込んでいく。集落対抗避難場所駆伝

等の イベントと避難訓練をミックスさせる。

・なりわい：住農漁商が融合した新たな産直販売を起こす。村独自のライフスタイルの体験から新たななりわいにつなげる。

上記提案の報告会には、野田村村長をはじめとする現地住民も参加し、活発な議論が行われ、8月21日付け『岩手日報』、『広報のだ』9月号（No.473）でも紹介されている。さらに、2013年3月には、第2回CWSの年度まとめの報告書を野田村に提出している。

3 - (2) . 2013 年度

2013年度においても当初より、現地・野田村の最新の動向把握に努めた。5月には研究代表者・玉川が現地にて、村内の復興状況及び特徴的な生業活動の調査を行い、その後、研究スタッフ全員で夏に行うべき活動のあり方を議論した。その結果、現地のなりわいを実際に体験する中で、復興の課題を考えていくことが重要であるとの結論に至った。これは本研究の大きな転換点となり、現地ではなりわい体験を中心とし、事後のフォローアップ作業により提案を練り上げていく形にCWSのスタイルを変えていくこととなった。5月～7月にかけては、東京グループの教員と学生により、事前ワークショップを開催、課題の抽出と今年度の現地での生業体験及びCWSに向けての目標設定を行った。

以上及び8月9日CWS事前調整（河村、村役場ほか）を経て、第3回CWSを8月11日～14日に実施した（参加・運営：学生・教員約30名（本研究活動メンバー22名に弘前大学、京都大学メンバーが加わる）。野田村協力者15名。協力：野田村商工会青年部、野田村青年会、チーム北リアス。後援：野田村（村長のコメンテーター参加））。

その後、現地での情報を持ち帰り、各グループが議論を重ねる中でさらに提言を精査した。11月8日には東京グループに河村が加わる形で中間報告会を行った。さらに作業を

継続、12月には今年度としての最終提言をまとめ、それが2013年度CWSの最終的成果となった。概要を簡潔に示すと以下の通りである。

・工房班：工房の作品を村内のストリートファニチュアとして活用し作業・休憩スペース等を演出、景観形成にも一役買う。

・漁業班：漁業と海産物を生かした体験プログラムの創出、他のなりわいや民泊システムとの連携、番屋を魅力的に。

・農業班1：産地消の促進、農業体験や調理実習を子供達に、IターンやUターン者への対応、農業経営のグループ化。

・農業班2：民間団体・NPOが行政と村民をつなぐ存在に、空き家情報バンク等コミュニケーションの場の創出、雇用の創出とUターン者の受け入れ態勢の確立、空間像「ほうれん草カフェ」。

2014年2月11日にはその提言の現地報告会を行い、広く村民の方々と交えて活発な議論が行われた。

3 - (3) . 2014 年度

本研究の最終年度となる2014年度は、前年度試みた「なりわい体験」を継続実施する一方、建築・まちづくり・防災を主テーマとする研究室の取り組みのまとめとして「野田村のむらづくり・まちづくりを担う方々と一緒に考え」て「持続可能な復興につながる提案」をしていくことを目標とした。

事前CWSを経てグループは、中心市街地、農業・民泊、漁業・漁港（番屋含む）の3つに再編されるに至ったが、昨年度と同様CWSは、民泊によるなりわい体験とそれを踏まえての提案を検討する形で、8月18日～21日に行われた（参加・運営：学生・教員19名、野田村協力者7名、協力：野田村商工会青年部、野田村青年会、チーム北リアス 後援：野田村（村長のコメンテーター参加））。

さらに、その後のフォローアッププロセスを経て、最終的に2015年2月10日と11日、

現地・野田村図書館にて 2014 年度のまとめの発表会を行った。以下班ごとに概要を示す。

- ・中心市街地班：夏まつりの山車の製作手伝い、被災地としての復興だけでなく、人口減、観光、文化等地域の課題を意識。中心街に対するシンボルロードに関するいくつかのアイデアを提案。

- ・農業・民泊班：農地の除草等の体験、仮設住宅での住民交流会・集会場での宿泊を体験。復興後の情報発信が重要。民泊やグリーンツーリズムについてのアンケート調査を行い提案。

- ・漁業・漁港：漁業体験、漁師メシの体験から、番屋のリノベーション案を模型にして提案。

以上、3年の研究期間(プレスタディ期間を含めれば4年間)において、素朴で物的な計画を中心とした提案から、当地のなりわいを体験し、被災地に寄りそう中でより地域に密着した提案を考案していくプロセスを構築がなされていった。

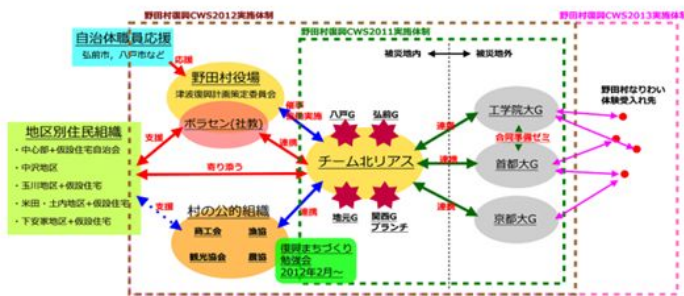
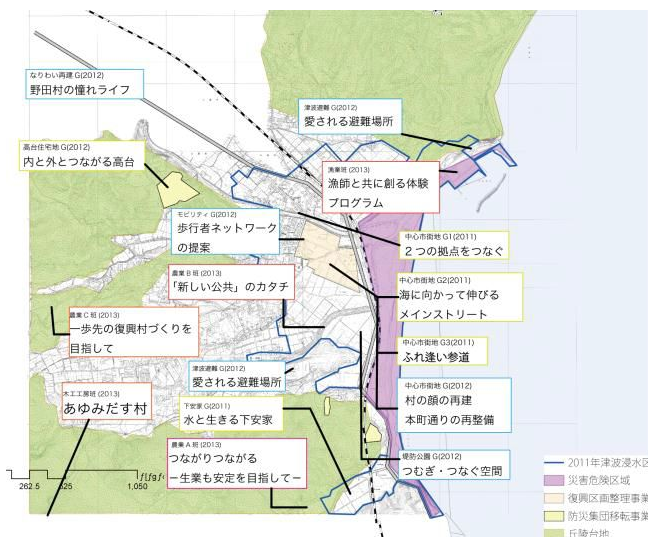
4. 研究成果

下図は本研究による提案を総括したものである。前章までの報告から、本研究の当初の研究目的のうち、「復興シャレットワークショップ(CWS)手法の構築」及び「被災地に寄りそった復興調査と復興まちづくり提案方法の実践的解明」については、以上

の4年間(うち科学研究費による研究期間は3年間)を通しての活動で、ほぼ達成されたと行ってよいであろう。特に、研究を進める上で重要だったのは、CWSの方法が2012年度までと2013年度以降は、大きく変わったことが挙げられる。すなわち、「事前準備+現地WS+補足フォローアップ」から、「現地なりわい体験+小括+その後の詳細フォローアップ型」への変換である。「寄りそう」形でのCWSの実践への転換が一定程度なされたと行ってよい。

具体的な提案としても、2013年度以降における、漁港と番屋のデザイン、農産物の地産地消システム、中心街のシンボルロードやストリートファニチュア等の提案に「被災地に寄りそう」ことが強く意識されており、地元のなりわいを念頭に置いた復興居住モデルの提言がなされている。また、「避難行動調査に基づく復興空間パターンの析出」については、明示的な成果として出ている事項は少ないが、2012年度のCWSでは、「避難の空間を日常生活の空間に埋め込んでいく」方向での提案が行われており、高台移転団地のデザインや本町通りの復興方針等にも潜在的に意識されている。

さらに本研究組織が、下図に示す通り、野田村に関わる集団・諸チームの中では、物的な計画提案を中心とした支援を行う数少ない存在であったことの重要性も見逃せない。ソフト面での提言のみではなく、「形」にすることが、地元の人々との議論を喚起させた点も重要である。地元の人々のCWS報告会への参加が、2011年には僅かに2名、2012年



は行政担当者が中心だったことに比して、2013 年以降はなりわい体験や民泊受け入れ協力者、さらに商工会のメンバーにも広がっていったことから、支援チームの中で、その役割を認知されるに至ったと言えよう。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件 いずれも査読無)

野澤康、田鎖潤一郎 「震災前後の道の駅に対する住民の認識と役割の変化に関する研究 - 岩手県野田村・道の駅『のだ』の事例 - 」、2014 年日本災害復興学会大会予稿集, pp.42-45

市古太郎、玉川英則、野澤康、河村信治 「岩手県野田村復興まちづくりシャレットワークショップ - 地元の方と一緒に復興を考える行為の可能性 - 」、2014 年日本災害復興学会大会予稿集, pp.38-41

河村信治 (2013.7) 災害ボランティアから協働による地域復興のプロセスへ: 岩手県野田村での活動事例 特別企画 1 東日本大震災 復興まちづくりのこれらに向けて(6), 公益財団法人都市計画協会機関誌「新都市」2013 年 7 月号, pp.59-61.

河村信治 野田村における震災復興支援活動記録: チーム北リアス 2 年目の展開 地域文化研究 第 21 号 (2012 年) pp.52-56

河村信治、齋 麻子 野田村における震災復興ボランティア活動報告(2): チーム北リアス 2 年目の活動と展望 八戸工業校等専門学校紀要 第 47 号 (2012 年) pp.69-76

野澤 康、市古太郎、河村信治 被災地における計画主体を組み立てる - 野田村復興まちづくりシャレットワークショップの活動を通して 都市計画 (日本都市計画学会誌) 299 号 (2012 年) pp.14-17

〔学会発表〕(計 13 件 以下は主要 9 件)

Shinji KAWAMURA "Students' Volunteer Works and the Charrette Workshop in Noda Vil.", Projects for Disaster Revival in National Colleges of Technology, 高等専門学校機構における防災教育と復興まちづくり支援の実践 = 防災技術と復興まちづくりを連動させた教育方法の開発 = , 国連防災世界会議 in 仙台 (仙台市), 2015.3.17

Shinji KAWAMURA "Community Empowerment for Redesign through Processes of the Charrette-workshop in Noda Village", The 5th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2014), (Western University, London, Ontario, Canada), 2014.10.30

河村信治、市古太郎、玉川英則、野澤康 岩手県野田村復興まちづくりシャレットワークショップ - 地元の方と一緒に復興を考える行為の可能性 - , 日本災害情報学会・日本災害復興学会合同大会 in 長岡(長岡市・アオーレ長岡), 2014.10.24
河村信治 「野田村復興まちづくりシャレットワークショップ」と継続的な地域支援活動の連動, ワークショップ「東日本大震災からの復興に向けた協働的实践とアクションリサーチ(2)」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会(東京都文京区・東洋大学白山キャンパス), 2014.9.7

Shinji KAWAMURA "Charrette-Workshops and Visions for a Long-term Recovery in Noda Village", Dealing with Disasters Conference 2013 with the 4th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM), (Northumbria University, Newcastle upon Tyne, UK),

2013.09.05

河村信治(2013.10)シャレットワークショップからみえる復興まちづくりの課題と展望, 日本災害復興学会 2013 年大阪大会(於:大阪府・関西大学高槻キャンパス), 2013.10.13

山下純哉、野澤康「シャレットワークショップによる復興まちづくりに関する研究」2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, pp.1105-1106,(札幌市・北海道大学) 2013.8.31

Taro ICHIKO(2013)What can planners do for post-disaster recovery? accompany-with approach as a context of Japanese planning realm, iscp2013, Special Session,, (Sendai-city), <http://www.cpij.or.jp/com/iac/sympo/13/specialsession.html>, 2013.8.23

Taro ICHIKO, Shinji KAWAMURA, Hidenori TAMAGAWA A report of an action disaster-research for recovery planning in Noda, Iwate prefecture ISSUE2012, (Tokyo Metropolitan University) ,Tokyo-Seoul Joint Seminar 2012年11月02日~2012年11月03日の間ポスター掲示

〔図書〕(計2件)

河村信治、市古太郎、野澤康 「協働による地域復興へ:学生シャレットワークショップの可能性について」,李永俊・渥美公秀(監修)永田素彦・河村信治(編)『がんばるのだ -岩手県九戸郡野田村の地域力,東日本大震災からの復興(2)』(総ページ数 222)、第10章(pp.192-217) 弘前大学出版会、2015年3月

市古太郎、河村信治、野澤康 「岩手県野田村復興まちづくりシャレットワークショップ」『東日本大震災合同調査報告都市計画編』(総ページ数 424)、

pp.106-113、2015年1月

〔その他〕(新聞報道)

2015年2月12日付岩手日報 「民泊体験生かし学生が活性化策 野田で発表会」

2015年1月16日付朝日新聞 「ボランティア 柔軟な支援体制を模索」の記事で、「チーム北リアス」の継続的支援を評価。

2013年9月1日付朝日新聞 大災害を想定し、復興しやすい環境を前もって整備しておく「事前復興」に関する記事で、市古太郎のコメントが掲載

2013年8月14日付岩手日報 「野田復興策 作業で学ぶ 秋ごろ提言まとめる 青森や東京の学生まちづくりグループ」地元広報誌「広報のだ」2012年9月号(No.473) 同年8月20日の発表会の様子を紹介

2012年8月21日付岩手日報 「避難場所認知へ若い発想 野田村復興ワークショップ 学生ら成果発表」

2012年8月19日付岩手日報 「野田復興に学生のか まちづくりワークショップはじまる」

6. 研究組織

(1)研究代表者

玉川 英則(Hidenori Tamagawa)
首都大学東京都市環境科学研究科教授
研究者番号:10171886

(2)研究分担者

野澤 康(Yasushi Nozawa)
工学院大学建築学部教授
研究者番号:00251348
市古 太郎(Taro Ichiko)
首都大学東京都市環境科学研究科准教授
研究者番号:10318355
河村 信治(Shinji Kawamura)
八戸工業高等専門学校総合科学科教授
研究者番号:80331958